

研究成果発表会 2006 報告

平成18年9月28日（木）、農業環境技術研究所研究成果発表会2006を「農業と環境を考える」というテーマで、東京の新宿明治安田生命ホールにおいて開催しました。農業環境技術研究所は2001年4月に独立行政法人として、5ヶ年の中期計画を立てて新たにスタートし、発足1周年の2002年4月と中間年の2004年4月に、研究内容と研究の進捗状況を広く世間に理解してもらうことを目指して研究成果発表会を開催しました。今回は、本年3月で第Ⅰ期中期計画が終了したので、この間の研究成果を、講演に加えてポスターセッションを設けて、広くお知らせしました。参加者は、行政部局、民間企業、大学、公立場所、他法人、一般の方など所外から156名、所内から65名、計221名でした。

発表会は、佐藤理事長および高橋農林水産技術会議事務局長の挨拶に続いて、北海道大学の石弘之教授より「農業が変えた地球の環境－環境史の視点から」というテーマで特別講演をいただきました。その後、生物多様性研究領域の山本勝利主任研究員より「豊かな生物相をはぐくむ農業を探る」、興語靖洋有機化学物質研究領域長より「大気中に広がる農薬－その拡散と制御を考える－」、物質循環研究領域の新藤純子上席研究員より「東アジアの食料の生産と消費拡大が水質を変える」、大気環境研究領域の長谷川利拡主任研究員より「大気CO₂増

加、温暖化で水稻の生育、収量はどうなる」と題して、第Ⅰ期の研究成果とともに第Ⅱ期での研究方向が報告されました。また、谷山一郎農業環境インベントリーセンター長より「農業を巡る環境の情報を発信する」と題して、農業環境インベントリーセンターが所蔵するデータや資・試料及びそれらの活用方法が紹介されました。

これらの発表に対して、休耕田での水管理、将来の水質予測モデルに貿易を加味できるかや水稻収量に影響が出るCO₂濃度レベルなどについて、会場との質疑が交わされました。今回は、特別講演をはじめいずれも時間（歴史）の流れと空間的な広がりについて視点が置かれており、環境研究の基本が時空間変化をとらえることにあることを再認識させられました。

さらに、講演開始前と休憩時間には、第Ⅰ期の研究成果17題がポスター発表され、参加者と熱心な意見交換が行われました。

参加者にアンケートへの回答を依頼したところ、90名の方から感想、意見が寄せられました。成果発表会については、「成果がわかりやすく説明されていた」、「東京で開催したことがよかった」など好意的な意見が圧倒的でした。また、研究課題や今回の発表会の講演、ポスター発表については、今日の社会的関心を反映してか、地球温暖化や食糧生産に興味を持ったという回答が多かったのが特徴でした。一方、「もっと広い視点で（問題解決のための）解答まで追求すべき」、「一般の方を対象としては説明不足」という指摘もありました。

発表会終了後の懇親会では、農業環境技術研究所友の会の会員や当日の参加者など約70名で賑わいました。今日の研究所のすがたを発足当時の歩みを振り返って熱く語る姿や最新の研究情報を交換する姿があちこちで見られ、盛会のうちに終了することができました。



特別講演をする石弘之北海道大学教授

（研究コーディネータ 今川 俊明）